

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	病態制御学領域呼吸病態内科学教育研究分野 氏名 田中佳人
指導教授氏名	奥村 謙
論文審査担当者	主 査 萱場 広之 副 査 伊藤 悦朗、 加藤 博之
<p>(論文題目)</p> <p>Impaired pulmonary function in the university students who had asthma in childhood (小児喘息が寛解した大学生における肺機能異常)</p>	
<p>(論文審査の要旨) 小児喘息のキャリアオーバーという小児アレルギー、あるいは喘息診療において大きな関心事となっている課題についての検討である。484 名(うち喘息既往症例 119 例)という大きな臨床的研究であり、情報として貴重である。</p> <p>結果として、小児喘息が寛解した大学生においては、呼気 NO 上昇や、持続する肺機能異常を呈する一群があり、アレルギー性炎症の継続していることが示された。また、これらの評価が将来的な症状の再燃の予測につながる可能性を提示した。</p> <p>筆者らは特異的病勢マーカーが限られている喘息診療において、近年特性・感度ともに喘息の診断に優れるとされる呼気 NO に着目した。NO は好酸球を主体としたアレルギー性炎症で増加することが知られており、組織における好酸球性炎症、即ち気管支喘息の根本的病態を反映する。さらに、この数年で臨床に導入が始まった強制呼気オシレーション法による気道の器質的変化を反映する指標についても同時に検討を行っている。強制呼気オシレーション法では気管支喘息患者の重要な病態の 1 つである気道リモデリングについても無侵襲的に評価できる可能性があり、その点でも本研究は注目に値する。結果として、小児気管支喘息既往群では NO 排出の多い一群のあることが示された。再燃する群と一致するかどうかは今後の検討を待たねばならないが、小児気管支喘息既往群において無症状ではあってもアレルギー性炎症が継続している一群があることが証明された。また、強制呼気オシレーション法ではリアクタンスが喘息既往群で優位に高く、従来言われた小児喘息はアウトグロウし、また病変は可逆的という概念(近年キャリアオーバー例の多さから疑念を持たれていた概念ではあったが)を刷新する材料を提供した。小児喘息改善例においても呼気 NO や強制呼気オシレーション法による評価を行い、アレルギー性気道炎症の評価および気道の器質的変化を注意深く評価することが重要であることを示した論文であり、特に気管支喘息診療においては意義の高いものである。以上より、本論文は博士号授与に値する。</p>	
公表雑誌名	弘前医学